第２回　聖書とは？

問１　聖書とは何ですか。

答　聖書は、ご自身が造られた人間に対して明らかにしておられる神のお心が記されたものであって、旧約 39 巻、新約 27 巻から成り立っている集合書です。集合書でありつつも、それは神を著者とした一冊の書物なのです。

問２　神が著者だと言っても、それは人間が書いたものなのではありませんか。

答　確かに書いたのは人間です。しかもひとりではなく、千何百年の長い歴史の中で、多くの人が互いに連絡を取り合うこともなく記したものにかかわらず、一貫した神のお心が記されており、すべての人の内に働かれ、神が書かせられたとしか言いようがないのです。

問３　神が人の内に働かれたとは、直接、神から言葉を聞いて、それを、一字一句誤りのないように書いたということでしょうか

答　そうではありません。聖書を書いた人々は、神がその人の内に聖霊（解説の所で説明します）を遣わし、その人の信仰と知恵に働いて助け、神のお心が分かるようにされたのです。

問４　いくら聖霊の助けを頂いても、人間が書いたものならば、そこには誤りがあったり、不足したり、余分なものがあったりするものがあると考えるべきでしょうか。

答　神が働かれたということは、人間が知らなければならないすべてのことを書くように導かれているので、そこには誤りがなく、不足も余分もないので、勝手に加えたり、

除いたりすべきではありません。

問５　もし神が今も生きておられるなら、今の時代の人々にふさわしい、昔よりも高度な内容のお言葉を加える必要があると考えられないのはどうしてでしょうか。

答　神のお言葉は、古い時代に語られたからと言って、その内容に低いものはありません。すべての時代の人々にとって、偉大なる神のお言葉として聞くに値する驚くべき深い内容なのです。

問６　それでは私たちは、聖書をどのようなものとして受け取ればいいのでしょうか。

答　それは、今も生きて働いておられる神が、この私に語りかけておられるお言葉として聞き、神が、私に対して、導き、救い、祝福された人生を送ることができるように働きかけて下さっているお言葉として聞くならば、神の力あるお言葉として、私たちの内に働くのです。

☆　解説　☆

今回は、キリスト教の中心として与えられている聖書について学ぶことにしましょう。キリスト教信仰に立っている人たちは、聖書が神のお言葉だと本気で信じています。どうしてそのように信じているのでしょうか。

聖書が神のお言葉であると信じることに、どのような意味があるのでしょうか、まずそのことから考えてみることにしまし

ょう。
　人間を、意味のある存在として造られた神がおられて、神の前にどのように生きることが、人間らしく生きることなのか、それを、人間を造られた神ご自身が教えて下さっているのが聖書だと言えます。これはたとえで考えれば分かることです。ある人が何か精密な機器を製作したとしましょう。意味なく作ったのでなければ、製作者がある目的を持って作ったはずです。その目的を知らないまま、その精密機器を使っても有意義に用いることはできないでしょう。製作者の目的を聞き、（使用者側に使い方を示している使用説明書、取扱説明書など）その目的に沿って用いる時、それは有意義なものとして使うことができるのです。
　人間も、神が何のためにお造りになったのか、（聖書では人間が偶然にできたとは考えていません。神が造られた製作品だと言っています）また造ったものをどのように導き、助け、祝福された歩みができるようにお考えになっておられるのか、それらすべてのことについて示されている神のお心を知らなければ、幸いな人生を送ることはできないでしょう。
　それらを知ろうとしないならば、道端に落ちている小石のようなもので、その存在意義が分からないまま、虚しい歩みをしなければなりません。あなたは偶然そこに落ちている小石のような存在でしょうか。そうではないはずです。意味のある存在、価値のある存在として造られたのです。意図をもって造られた神のお心が示されているのが聖書なのです。言わば、人間の使用説明書、取扱説明書と言ってもいいものです。
　確かに、聖書として実際に文字を書きとめたのは人間であります。しかもひとりで書いたものではなく、正確ではありませんが、紀元前 1300～1400 年頃に、最も古い神のお言葉と

して書かれたのが、最初にある創世記ですが、その時から新約聖書の最後の書、ヨハネの黙示録が書かれたのは、およそ紀元後100年頃ですから、この間40数人の人たちの手によって、時代も場所も異なり、しかも編集会議が開かれたわけでもありません。ある人は王であったり、羊飼いであったり、預言者であったり、漁師であったりさまざまです。

時間も場所も異なる長い歴史の中で書かれてきたものを、神の導きにより一つに集められ、神の書とされたのは驚くべきことでした。しかも、その内容は、人間が書いたものでありながら、一人一人自分の思いによって書いたというよりも、全体に一本の筋が通っていて、別々の人間が書いたものとは思えないのです。そこに、すべての著者の背後に、神が働いておられるという事実が見えてくるのです。

しかも、聖書として集められたある時期から今日に至るまで、その内容に修正が加えられたり、新たに書き加えられたり、消されたりしませんでした。なぜなら、神のお言葉は、古びたり、無意味な内容として価値がなくなったり、また、単なる昔話で終わるようなものではなく、力ある神が語られた、いつまでもその価値が変わらない、驚くべきお言葉だからです。人間の言葉であれば、必ず考え方が変わっていくので変化します。しかし、神のお言葉は全く変わることがないのです。それは、神のお心が決して変わることがないからです。聖書にこういう言葉があります。「父（ここで言われている父とは、神は創造者として、信じる者の保護者、導き手として、父と呼ばれている）には、変化とか回転の影とか言うものはない」と。（ヤコブの手紙1：27）もし心変わりするような神様であるなら、信じるに値しないと言っていいでしょう。だからこそ、今の時代にふさわしく書き換えられる必要もなく、いつまでも変わることのない

お言葉として、しかも、今の私の人生にふさわしい御言葉を語りかけて下さっていると本気で信じることができるのです。

聖書が全く書き換えられてこなかったと言っても、信じられない方がいるかもしれません。しかし、考古学的発見によって紀元前１世紀頃の聖書の巻物が、聖書の舞台となっている死海のほとりで発見され、専門の学者がそれを詳しく調べてみると、小さな違いはあっても、今人々の手に持たれている聖書と全くと言っていいほど変わりはないのです。（1947 年頃、死海のほとりにあるクムランの洞窟から巻物が発見された）

それでは、聖書はどのように保存されてきたかと言いますと、紙と筆記具が長期保存に耐えるものではない時代でありましたから、それを後代に伝えていくためには、古びる前に書き写され、それが何代にも亘ってなされてきたのです。これは大変な作業でした。誤りがないように慎重に筆写され、少しの違いもないように尽くされたのです。ここにも神が働かれ、神のお言葉が正しく後代に伝えられるようにされたのです。

それでは少し話を元に戻しましょう。神が直接書かれたものではなく、人間を用いて書かれたと言ってきました。誤りやすい人間を用いて、どのように神のお心を、誤りなく書くことができたのでしょうか。神が一字一句教えられ、それを記した人がただ書き写したと言うのでしょうか。そうではありません。神は、聖書を書かせようとされた人の内に、聖霊という神様を遣わされ、その人の信仰と知恵に働き掛け、誤りのない神のお心を書くことが出来るようにされたのです。

聖霊という神様とはどのような神様でしょうか。人間を造られた神様とは別に、神様がいるというのでしょうか。ここではそのことについてあまり詳しく説明すると、話が外れてしまいますから、理解しておくべきことだけに限って記しましょう。

神様はお一人なのですが、神様は人間のために、形を変えて働いて下さるのです。聖霊なる神様とは、ただお一人の神様が、人の心の中に働きかけて下さる神様として、人間の内に遣わして下さり、（心の中にというより、神を思うことのできる霊の部分にです。霊については後に説明します）その人が持っている信仰と知恵の内に働き掛け、それによってその人が、神のお心を正しく書くことができるように導かれたのです。人の持っている信仰と知恵はすべて同じではありませんから、その内容は皆異なったものとなりますが、そこに聖霊なる神が働かれることによって、誤りなく神のお心が書かれるように導かれ、しかも書いた人の特徴が残るのです。

しかし、いくら聖霊なる神の助けを頂いても、人間が自分の信仰や知恵によって書いたのであれば、そこには誤りがあったり、不足していたり、余分なものがあったりするのではないでしょうか。確かに人間は完全な存在ではありませんから、誤った内容を書く可能性が十分にあります。しかし、聖霊なる神の働き掛けというのは、その人の人間性をなくされることなく、最大限に用いられつつ、誤りのないように検閲され、神のお心を書かせられたのです。それが聖書です。だから、誤りもなければ、不足もなく、余分なものもないと言えるのです。（後のどれほど優れた信仰的知識を持っている信仰者であっても、誰も神の御言葉を書くようにはされませんでした。あのヨハネの黙示録で聖書は完結したとされ、それ以後は誰にも神の御言葉を書かせられませんでした。

それ故、後の時代の人が、これでは聖書は十分ではないと言って書き足したりする人が出てきましたが、それは偽の聖書であり、偽のキリスト教です。よく知られている偽のキリスト教について簡単に触れている必要があるでしょう。

モルモン教という偽キリスト教がありますが、モルモン書という、1800 年代に啓示を受けたというアメリカの預言者の書を聖書と同じように加え、聖書以上にそれを重んじたりして、キリスト教が神のお言葉として大事にしてきた聖書とは異なった教えを伝え始めたものです。

また統一教会という偽キリスト教もあります。統一原理という創設者が書いた書物を、聖書と同じ価値ある書として用いたり、聖書よりもその教えの方を中心にしたりしています。それは、聖書とは全く異なったものにしているのです。

またエホバの証人（あるいはものみの塔）という偽キリスト教もあります。聖書にある重要な内容を受けとめることができず、創設者が、自分たちに都合のいい考え方に合わせようとしてそれを削り、違った内容すり替えてしまっています。そこには真実な神のお心が全く示されてはいません。

それ以外にも、聖書にはない内容を勝手に付け加え、信仰の重要な教義として加えて、マリヤ崇拝をしているカトリック教会なども、神のお心として示されている聖書の意に反し、逆らう偽キリスト教に入ります。もっと多くの偽キリスト教がありますが、ここで語られている意味を酌んで頂ければ、どこがおかしいか自然と分かって頂けるでしょう。

これらの偽キリスト教は、すべて聖書の内容を変更したり、新たな内容を付け加えたりして、自分たちの都合のいいように、聖書の示されている神のお心を変えてしまっているのです。こういうことをすれば、神が示された唯一の正しい基準はなくなってしまい、どんどん変化していきます。全く人間的なものに落とされてしまうからです。それでは何がキリスト教か分からなくなるでしょう。聖書のみを神のお心として信じる純粋なキリスト教は、そのような偽キリスト教とは一切関わりを持ちま

せん。神とは無関係なものだからです。無関係なだけではなく、神の忌み嫌われる恐ろしいものだからです。彼らが示している神は、聖書に示されている神とは全く別物です。

このような意味でキリスト教とは、神がご自身のお心として示して下さった聖書を、語られている通りに正しく受けとめた宗教のことを指していることが分かって頂けたでしょう。長い年月が経っても、わずかも変わることなく、新たに付け加える必要もない、人間のために示された神の深いお心として、聖書を唯一の拠り所としているのがキリスト教なのです。聖書を書く人に働かれた聖霊なる神様は、その神のお心を受けとめようとする人の心（霊）にも働きかけて下さり、神のお心を理解できるように助けて下さるのです。

聖書は決して、規則が書き並べられているような冷たい内容なのではなく、私たち一人一人を、ご自身が造って下さった大事な人間として、愛し、導きたいと願って書き綴られた、神からの心のこもった手紙だと言っても過言ではありません。その内容の中に、今も働いて下さっている神が、語りかけて下さっているお言葉として聞くことができるのが聖書なのです。

そこには、神は、ただ甘い父親のようなお方ではありませんから、甘やかされるお方ではなく、罪（聖書の中で言う罪とは、神のお心をないがしろにすることだと言っていいでしょう）を犯す者に対しては、時には厳しい指摘をされますが、神様を意識してその御言葉を聞くならば、そこに、神様は必要な導きと助けとを与えて下さり、時には励ましとなり、時には力となり、時には喜びとなるように、臨んで下さるのです。これは誰にでもできる経験です。あなたもぜひその経験をして、神様がこの私の人生をどのように導き、祝福しようとして下さっているか体験して頂きたいのです。

聖書には、人間にとって最も重要な人間性を高める力があり、人間らしく生きる力を与えてくれる御言葉なのです。もし聖書が単なる金言集のようなものでしかないなら、私の魂を救い出すことはできないでしょう。もし聖書が、今の私に語り掛けて下さっている神の御言葉でないとするなら、宗教的知識を与えるだけのものでしかないと言えます。私たち人間を根底から造り変える力があると信じることができないようなものでしかないなら、あってもなくてもそうたいしたことはないでしょう。しかし、神の御言葉は、単なる言葉ではなく、そこには神の力が流れており、人を造り変えずにはおれない驚くべきものなのです。あなたもその力をぜひ体験してみて下さい。

最後に、聖書がどうして旧約聖書と新約聖書に分かれているのかを簡単に述べてみましょう。旧約、新約のこの「約」とは契約のことを意味しています。神は、人間を契約の相手として選び、準備段階の契約として、旧約聖書を与え、イエス・キリストを遣わされて後、完成された契約を結んで、私たちを救い出そうとして下さったのです。それ故、簡単に言うならば、旧約は仮契約であり、新約は本契約であると受けとめて頂いたらいいでしょう。それ故、両方で完結したので、両方とも重要なのです。その転換点が、イエス・キリストが人間としてこの世に遣わされたことなのです。このことについては別の項で学ぶことにしましょう。